

感性、物づくり、物語 — 共感の世界の広がり と 繋がりを考える — (全 12 回)

第 10 回 五感の見直しと「共感」

長島知正 (早稲田大学理工研招聘研究員)

1. はじめに

前回、いわゆる近代西欧における経験論に対する評価の見直しと共に、その中核を占めるヒュームによる「共感」の内容を検討しました。

その結果、「共感」について、ルソー、スミスのそれと合わせ、今まで3種類の「共感」を取り上げたこととなります。理性中心に進む西欧にあって、主知主義の問題点を指摘するという姿勢や一般的な経験論という思考方法に共通するところがあっても、共感自体については、それぞれの文脈に沿って考えられているため、この段階で取りまとめることには、余り意味はなさそうです。

そこで、共感についての理解をさらに深めるため、今回は今まで注目されなかった角度から「共感」にアプローチしてみます。

一般的に云えば、共感是他者に対して私の中で起こる感情です。つまり、人間が持つ特殊な感情です。今までの「共感」に関する議論でも、共感が感情の一種ということは前提されていても、感情がどういうものかについては、常識の範囲以上に立ち入っては考えられることはなかった。ところが、この人間の感情というものがどのようなものかということほど、人や分野によって、定まっていけないものはないのではないか。このようなことが起きている理由は「感情とは何か」という問いに対して、分野ごとに異なるシナリオで考えられて来たということと共に、実証的な調査研究が進まなかったためではないでしょうか。近年、実証的手段は飛躍的に改良されてきているとは云え、実験による結果が定着するには未だ時間がかかりそうです。ここにも、理系と文系の壁の具体例があると指摘しておきます。

ここでは、感情とはどんなものか、イギリス経験論がおきた原因と目されたデカルトに習って整理することにします。

デカルトといえば、近代科学の確立に当たって、心身二元論や精神（心）の身体に対する優位を主張した人物として知られる。しかし、そのデカルトには「情念論」という書物があり、そこで文字通り人間の情念（デカルトの情念は普通の意味の感情にほぼ同じ）を考察している。デカルトが最晩年に情念論を著した経緯や理由は著者には未だ不明なため、彼の思想全体についても飲込めないところがあるけれど、ここでは、デカルトがどの様に感情を捉えたか、という問題を經由して、「共感」に接近することを試みます。デカルトは「共感」についても視野に入れていたようですが、その解釈や評価は素人には難しい問題です。

2. デカルトの情念（感情）論

ここでは、デカルトが「情念論」を通して、感情とはどのようなものと考えたかについて検討します。デカルトは情念論においても心身二元論の立場を維持しているから、心と身体の間は原理的に区別されます。しかし、心と身体は互いに無関係ではなく、心と身体には相関、つまり、心身相関があるというのです。そのメカニズムとして、有名な動物精気と脳内の松果腺という部位による仕組みを導入し、心は松果腺から精気の流れや神経を介して身体に影響を及ぼし、また腺は動きに応じて様々な知覚を受け取るとした。

ところで、「受動」、「能動」という言葉遣いには注意が必要です。一般に、あるものが生じたとき、その生じている主体から見ると「受動」、それを生じさせる主体からは「能動」と云われます。

情念（パッション）は一般に働きかけを受けるパトス（受動）の意味を持ち、元来「何かに襲われる」という意味とされる。その意味で、情念は心における受動と考えられています。心の受動に対して、一般に心の能動にあたるものは何になるのか。端的に、心が働きかけるものとしての意志である。一般に、それに対応する心の受動は何になるのか。その答えとして、デカルトは知覚であるという。さらに彼は、心の能動、心の受動にはそれぞれに二種類あると述べています。つまり、意志についても、まず身体に関わらない、純粹に精神に関わる意志として、信仰や創作などへの意志があり、他方、自分の身体に及ぶ意志の

働きの典型として身体的運動があります

心の受動としての知覚についても、心に原因するものと身体や物（下線、著者註）に原因するものを考える。心を原因とする知覚とは、自らの意志や意志に依存した想像、思惟の知覚です。

最後に、身体や物に原因する知覚は、以下の三種に分かれる。まず、我々の感覚を刺激する外部の事物が関係する外部知覚。第二に身体に關係する知覚として、飢え、渇きなどをはじめとする欲求の知覚や苦痛、熱など身体に関わる知覚。第三として、私達の心に関係する知覚がある。私達の心のうちに結果が感じられ、普通その直接的原因が知られない知覚である、「よろこび」、「愛」、「悲しみ」、「憎しみ」などの感情です。身体や物に原因する知覚のなかで、第三の知覚、つまり、心に関係する知覚が情念、つまり感情と呼ばれるものになる。こうして、デカルトは情念、つまり感情について、身体を原因とし、心に結果する心の受動として捉えた。これと第二の身体に關係した第二の知覚をまとめれば、身体（内部）知覚と見ることも出来ます。つまり、それらは第三の知覚として、よろこび、愛、悲しみ、憎しみ などの感情や第二の知覚として、飢えや渇きなどの欲望や苦痛、熱などの身体に感じる感覚などが含まれます。ここで、身体に感じる苦痛や熱といった（身体）感覚は「苦しい」あるいは「暖かい」などの感情に繋がって、混じり合うことを認められるでしょう。

こうして導かれた情念について、デカルトは基本的な情念が幾つあるか、またどのようなものを明らかにしている。それは図1に示した、〈驚異〉、〈愛〉、〈憎しみ〉、〈欲望〉、〈よろこび〉、〈悲しみ〉の六種類です。彼の情動（感情）論の最大の特徴は、〈驚異〉、つまり、「おどろき」ということを情動の中で最高位に挙げていることですが、ここでは、デカルトの情念（感情）そのものについての議論はできません。

3. 感情から共感へ至る

以前、本連載の中で取上げた「共感」は近代へと向かう西欧の時代のものでした。それらの中で考えられていた共感とは、他者が行った行為に対して、私が心の中でそれを認めるか否か判断するという事です。しかし、現在、私達

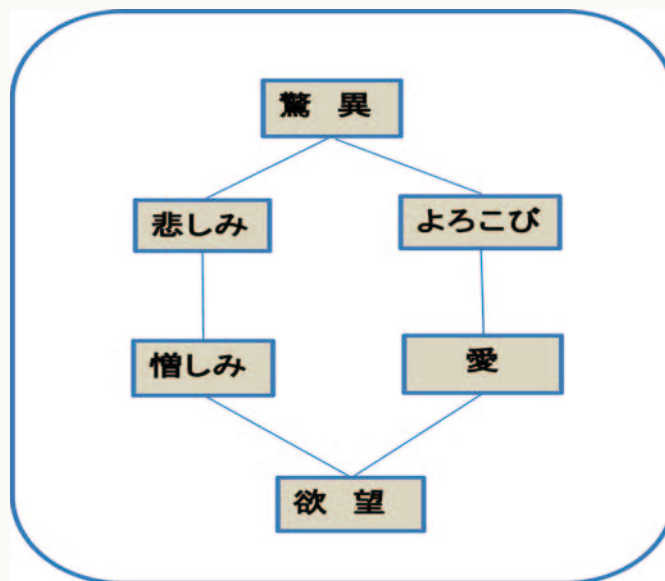


図1. 基本情念

の生活の中ではさらに多様な対象や事象に対して共感という言葉は使われるようになっていきます。例えば、共感の対象には、人工的な工業的製品やディズニー・キャラクターから最近では自治体などのぬいぐるみ等範囲は非常に広い。また、自然に対して共感するという事も云われます。こうした、多様な事象を含めた「共感」現象に対し、思想レベルから、様々な接近が試みられていますが、未だまとまった理論にはいたっていない様に思えます。更に、共感を工学的にも使えるようにするには、未だ多くの点で整備が求められます。以下、共感に接近する一つの方法を取上げることにしましょう。

ところで前節で見たように、情念（感情）は、こころの受動である知覚として導かれた。ここでは、知覚のもとにある感覚について整理することにします。通常、人には五つの感覚、視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚のいわゆる五感があるとされ、そのもとに人間の感覚が論じられます。そうして、私達は近代化と共に視覚に依存した生活をおくるようになったと云われます。確かに、「人は見た目がすべて」などという言葉がマスコミで取り上げられるばかりか、近年のスマホなどの情報機器も視覚依存を増幅させ、これからますます五感の中で視覚の役目が突出して行きそうに思えます。

理性は見ることを基点とし、視覚と結びついていることは否定しがたいとは云え、「視覚優位」は絶対的なものなのではないでしょうか。実は、西欧近代化の過程において、いわゆる合理主義に異を唱えた経験論の系譜の中に、視覚優位を否定したパークリーがいました。彼に依れば、視覚だけでは物の大きさも、また、距離も視覚だけでは分からない。視覚により物を見るというのは、実際には視覚と触覚との共同作業によっているのであり、触覚が基本であるとした。つまり、触るという身体を使うことによってよく見ることが出来ると云ったのです。

こうしたパークリーの視覚論は、視覚優位を意識した極端な主張のため、一般には受け入れられていないようですが、そこには五感というものに対する私たちの素朴な“常識”が妨げている可能性があります。感覚と云えば五感という私達の感覚の分類はどこに根拠があるのでしょうか。感覚分類の見直しも検討に値すると思います。下は、そうした一つとして、生理学の立場から感覚が見直された、新しい分類の一つです：

- 1) 特殊感覚：視覚、聴覚、嗅覚、味覚、平衡感覚
- 2) 体性感覚：触覚、圧覚、温覚、冷覚、痛覚、運動（筋肉）感覚、
- 3) 内臓感覚：臓器感覚、内臓感覚

ここで、注目すべきは2) 体性感覚で、触覚と運動の感覚が一緒の感覚に分類されていることです。つまり、体性感覚はいわゆる身体感覚としての「体感」をまとめたもので、その分類根拠は、神経伝達システムにあります。つまり、特殊感覚は、信号は脳神経により伝達されるのに対し、体性感覚は体性脊髄神経によって伝達される。また、内臓感覚は自律神経系によっています。今後の感覚論や感性論は、五感に依らず、このような生理的に裏付けのある感覚の新しい分類と整合する理論が求められねばならないでしょう。

ここでは、そのような方向への一歩として、体性感覚の意義を考えます。

つまり、上で述べたように、体性感覚は、従来の触覚とは異なり、触覚をはじめとする皮膚感覚に筋肉運動を含む運動感覚が一つにまとまった感覚になっています。つまり、従来の触覚のような単に「何かに触れる」というだけの外部にあるものを感じる感覚ではなく、「熱い」、「冷たい」、「痛い」などの身体表面の感覚と共に筋肉運動を含む身体運動感覚が結びついているのです。

このことの意義は、以下のようにまとめられるでしょう：

まず、触覚は皮膚表面の感覚であり、視覚、聴覚、味覚、嗅覚と共に外受容感覚である一方、運動感覚は筋、髄、関節など身体内部の感覚です。従って、体性感覚は、視覚、聴覚、嗅覚、味覚などと結びついて外部の世界に開かれると同時に身体内部深層に向かう経路を持っています。このように、体性感覚は、外部世界および内部世界両面にまたがって関わっている (a) こととなります。

中村雄二郎によれば、この体性感覚の性質は、知覚自体についても、通常考えられている「受動的な知覚」に留まらない「能動的な知覚」という考えに結びつきます。

つまり、能動的な知覚とは、我々の実際の知覚は、運動（行動）と共になされ、その結果、知覚は主体の行動に伴い、能動的になる訳です。能動的知覚は具体的には、記憶に埋め込まれた意味を選んで思い出す (b) ことですが、それは、外界へむけて行動する主体の志向性、つまり主体の構えとも云えるものです。

ところで、上の下線部 (a)；体性感覚は外部世界および内部世界両面に関わっている感覚である、および (b)；能動的知覚、運動に伴う知覚は記憶に埋め込まれた意味を選んで思い出すこと、はいずれも「共感」という現象が起こるために必要な条件と解釈できるでしょう。

尚、以前、「共通感覚」について説明しましたが、「共通感覚」が「共感」と関係するという議論もあります。それについては、次回取り上げることにしたいと思います。